

かけはし～『注カフェ』から考えよう～第55号

『注カフェ』という言葉聞いたことはありますか。『注文に時間がかかるカフェ』を省略した言葉で、吃音(きつおん)がある若者が接客するカフェのことです。吃音とはなめらかな発話が難しい言語しょう害の1つで、連発「わわわわたしは」伸発「わーーわたしは」難発「……わたしは」の大きく3つの症状があります。『注カフェ』は大学や施設、イベント会場などに1日限定カフェを出店します。吃音を持つ若者には接客という経験を通して自信を、来場者には交流を通して吃音についての理解を、という目的に賛同した個人や団体の依頼によってプロジェクトが立ち上がります。主催者が負担するのは飲み物や食べ物の実費や会場費などで、料金は基本無料なので利益はできません。2021年8月に東京で始まった『注カフェ』の活動は広がり、檀原市でも2023年4月9日に上品寺町のデイサービス絆で開催されました。『注カフェ』スタッフは4名が標準で、開催地ごとにInstagram・X・公式HPで募集しておられ、参加希望者が多くてメンバーになれない場合もあるそうです。『注カフェ』に参加した、吃音がある児童の保護者からは「吃音のある同年代の子どもたちと話すこともできた。息子にとっても貴重な経験でした。」との感想もありました。



吃音は日本で約1%の人が症状を抱えるとされています。比較的珍しい症状ですが、その存在はあまり認知されていないのではないのでしょうか。理由として、話し方を工夫したりコミュニケーションを避けたりして症状を隠す人が少なくないことなどが考えられます。例えば『注カフェ』発起人の奥村安莉沙さんはあ行が苦手なので、あ・い・う・え・おで始まる言葉を言い換える作業をずっと脳内で繰り返しているそうです。そのような見えにくい吃音ですが2～4歳の年齢だと5%～11%の割合で発症するといわれています。また、国立障害者リハビリセンターの調査では3歳までに吃音を発症したことがある人の割合は約9%とのデータもあります。治療法はまだ確立されていませんが、吃音へのからかいやいじめがなければ、年齢を重ねるに連れて症状が自然に軽くなるそうです。

九州大学病院菊池良和医師が学級で大切にすべきことを4つに整理してくださっているので紹介します。①話し方をまねされたり、笑われたり、「なんでそんな話し方なのか」と聞かれると、非常に困惑します。からかいはやめさせてください。②話すのに時間がかかっても待っててください。答えがわからない、発言したくないわけではありません、努力しても声が出ない状態だと理解してください。③「ゆっくり」「落ち着いて」「深呼吸しよう」などという話し方のアドバイスをしないでください。効果がなく逆にプレッシャーになります。④苦手な場面については、本人の希望に沿ってご対応ください。

菊池さんは「先生の一言には非常に効果があり、子どもは助かります。」とも述べておられます。吃音については、私たちにできることがたくさんありそうですね。最後に周りの子どもたちに対して「〇〇さんは吃音なのでと説明して欲しかった。」という当事者の声があります。また逆に、吃音を公にされたくないという当事者の声もあります。吃音のある子が望む対応は一人ひとり違うので、望む対応を適切に把握することが肝要です。

人権・地域教育課